

王様の耳はロバの耳

(ギリシャの神話)

昔、ギリシャのある国に、ミダスという王様がいました。王様は、ある出来事で神様をおこらせてしまい、耳をロバの耳に変えられてしまいました。

王様は、そのことをだれにも知られたくなかったので、いつも大きなぼうしをかぶつて、耳をかくしていました。

けれども、かみの毛を切るときだけは、ぼうしをぬがなければなりません。王様はかみを切る男に言いました。「わたしの耳のことをだれかに話したら、命はないぞ。」

男は、だれにも話しませんでした。けれども、だまっていることが苦しくて苦しくてたまりません。そこで、男は野原にあなをほり、そのあなに向かって「王様の耳は、ロバの耳。」とさげんで、土でうめました。

やがて、その場所にあしが生えてきました。風がふくと、あしはさらさらとゆれて

「王様の耳は、ロバの耳。」とささやきました。こうして、ひみつは国じゅうに知れわたってしまったのです。

ひみつは、いつかはもれてしまうものだという教えとしても、この話は語りつがれていきます。

1 王様の耳は、何の耳に変えられてしまいましたか。



2 王様が、いつも大きなぼうしをかぶっていたのは、どうしてですか

3 男が、あなに向かってさげんだのは、どうしてですか。

4 ひみつが国じゅうに知れたったのは、どうしてですか。

ア　男が人々に話したから。

イ あしが、風にゆれてささやいたから。

ウ　王様が自分で話したから。